黄金（きん）の騎士団

下

井上ひさし

講談社文庫

黄金（きん）の騎士団（下）

井上ひさし

講談社

|著者| 井上ひさし　1934年、山形県川西町（旧小松町中小松）生まれ。上智大学フランス語学科卒業。放送作家としてNHK人形劇「ひょっこりひょうたん島」（共作）などで活躍を始める。'72年に『手鎖心中』で直木賞を受賞。'86年『腹鼓記』『不忠臣蔵』で吉川英治文学賞、'99年に菊池寛賞、2001年に朝日賞、'03年に毎日芸術賞をそれぞれ受賞したのを始め、数多くの賞を獲得している。おもな著書に『四千万歩の男』（全5巻）『ふふふ』『ふふふふ』（以上、講談社文庫）、『一分ノ一』（上・下）『少年口伝隊 一九四五』（ともに講談社）、『東京セブンローズ』『ボローニャ紀行』（ともに文春文庫）、『イソップ株式会社』（中公文庫）、『一週間』（新潮社）、『初日への手紙 「東京裁判三部作」のできるまで』（白水社）などがある。'10年に75歳で永眠。

黄金の騎士団(下)
井上ひさし
© Yuri Inoue 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年1月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277733-9

目

次

目次

影 ―― 9
子どもの国 ―― 34
保険騒動 ―― 58
玉 ―― 82
咲花子供歌舞伎 ―― 109
オッペンハイマーの影 ―― 135
勝負 ―― 158
咲花の森の中で ―― 182
密談 ―― 211
トレンドグラフの謎 ―― 234
パーティの準備 ―― 260
脚本づくり ―― 285
秘書とディレクター ―― 310
解説　バブルの風に向かう小説家　関川夏央 ―― 335

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

講談社文庫

黄金（きん）の騎士団（下）

井上ひさし

講談社

目

次

目次

影 ―― 9
子どもの国 ―― 34
保険騒動 ―― 58
玉 ―― 82
咲花子供歌舞伎 ―― 109
オッペンハイマーの影 ―― 135
勝負 ―― 158
咲花の森の中で ―― 182
密談 ―― 211
トレンドグラフの謎 ―― 234
パーティの準備 ―― 260
脚本づくり ―― 285
秘書とディレクター ―― 310
解説　バブルの風に向かう小説家　関川夏央 ―― 335

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

黄金の騎士団（下）

影

大きなトランクを四つも車に積んで若葉ホームへ小沢正太がふたたび現われたのは、それから一週間後、黄金週間（ゴールデンウイーク）直前の火曜日の正午である。だれもいない食堂で自分で茹でたアンチョビのスパゲッティをたべているところへ小沢が入ってきて、

「ほほう、ばかにうまそうじゃないか。ちょっと席をどけ」

ぼくを椅子から追い立ててスパゲッティの皿の前に坐ってしまった。

「中小企業は後継者難。こんなぐーたら息子でも、親父はずいぶん頼りにしてくれているらしい。説得するのに一週間もかかってしまった」

そうぞうしい音をたてながらしばらくはスパゲッティを呑み込むのに専念していたが、そのうちに腹の虫もおさまったと見えて、

「なんだか浮かない顔をしているじゃないか。なにか心配なことでもあるのか」

はじめてぼくの冴えない表情に目をとめた。

「どんなときでも笑顔を絶やさないのが外堀公一のたったひとつの取得だと思ったのに、どうしたんだ」

「……べつに」

「おれが転がり込んできては、やっぱり迷惑かね」

「つまらない勘ぐりはよせ。おまえがきてくれたことは大歓迎だよ。余計なことは考えずに早くめしをすませてしまえ」

小沢を食堂にのこして、ぼくは彼のトランクを二階へ持ってあがった。いま、ぼくは子どもたちの寝室で眠ることにしている。小沢は、前にぼくが使っていた部屋で寝起きすることになるだろう。それにしても小沢は勘のよく働く男だ。たしかにぼくは心配事を抱えている。それを一目で見抜くとは鋭い。

なによりも、黄金の騎士団の経済活動の中心的存在、小早川文夫の生命の炎が消えかかりつつある。この数日来、文夫にひどく元気がないのだ。まず食事をとらなくなった。またディスプレイ用ブラウン管の前に坐って次々に現われては消える数字の行列を見つめ、それを解読、かつ分析し、シカゴ大豆の売りか買いかを決定するのが文夫の仕事であり、生甲斐でもあるのだが、このごろ長くは坐っていることができなくなった。すぐ苦しそうな息遣いになる。肩がはげしく上下に波を打つ。目から輝きが失われる。早老症患者の平均寿命は、元看護婦のQプロの津田さんの話では、十五歳

前後とのことだが、商品先物取引で神経と体力とを酷使したためか、ここ一日、二日のうちに、いちじるしい老いが文夫の身体のあらゆるところを覆いはじめている。

小早川文夫の急激な体力の衰えは、彼の相場に対する「読み」をも鈍らせているように、ぼくには思われる。

今は四月二十六日の昼すぎ、二十五日のシカゴ商品取引所が五、六時間前に引けたところだが、五月限（ぎり）の大豆の終り値は、一ブッシェル（二十七・二キロ）当り六ドル五十八セント½に下っていた。シカゴ大豆の取引単位、すなわち一枚は五千ブッシェルだから、大豆一枚の価いは三万二千九百二十五ドルである。

ところが、二週間ばかり前、黄金の騎士団がシカゴ商品取引所のフロア・ブローカーのゴアさんを通して大豆を買ったときは一ブッシェル当り六ドル八十三セント、したがって一枚では三万四千百五十ドルだった。つまり一千二百二十五ドルの損が出ている勘定になる。

しかも黄金の騎士団の買った大豆は一枚や二枚ではない。なんと三千枚なのだ！そこで損は一千二百二十五ドルの三千倍、三百六十七万五千ドルの巨額に達する。一ドル百二十五円のレートで日本円に換算すると、四億五千九百三十七万五千円になる。たったの二週間で約四億六千万円という途方もないお金が消えてしまったことになる……。

もっとも五月限の先物取引である。五月末までに「買い」とは反対の行為の「売り」を行って取引を完結させればよいので、この損は、今のところは、ある意味では「隠されている損」だ。さらに黄金の騎士団が実際に支出したお金は、一枚当り一千五百ドルの委託証拠金（といっても三千枚になると、ざっと六億円もの大金になってしまうのであるが）――。だからそう心配することもないかもしれないが、それにしても……！

「外堀さん、そう騒ぎ立てちゃだめだよ」

と、ゴアさんからテレックスが入るたびに気を揉むぼくを信彦たちはたしなめるが、正直のところ、ぼくは居ても立ってもいられない気持で毎日を送っている。黄金の騎士団の買った五月限の大豆が、たとえば一ブッシェル当り三ドルと、いまの半値になったら七十億円の損、さらに三分の一の二ドルにでもなったら九十億円の赤字、黄金の騎士団は丸裸になってしまうではないか。

商品先物取引にはまるでうとくてよくわからないのだが、それでも早く手仕舞いして清々（せいせい）した方がいいと思う。黄金の騎士団には、ニッケルの先物取引で得た九十億円もの巨利がある。いさぎよく現在までの損を支払って、それでも八十五億円は残るのだから、その金で安心で確実な未来設計を立てるべきであると考える。ところが文夫は「買い」一本なのだ。今朝も文夫はゴアさんに、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com